

前期日程の受験者による「配点の自己申告制」の効果と問題点

林寛子（山口大学）

山口大学では一部の募集単位で「配点の自己申告制」という入試方法を導入している。この入試方法を15年前に開発したR学部A学科は、導入以降志願倍率が上昇し、そのまま志願倍率を維持している。「配点の自己申告制」は筆記試験における1点刻みの選抜ではあるが、画一化した条件の下での選抜ではない。入学者は大学入学後に「配点の自己申告制」の条件の違いによる特徴がみられ、「配点の自己申告制」という入試方法により多様な入学者を獲得してきたことが明らかになった。

1 はじめに

山口大学では、R学部の一部の募集単位で「配点の自己申告制」という入試方法を導入している。この入試方法はR学部A学科において開発された。A学科は大学全入時代や大学法人化に対応するため、平成7年に5学科から3学科へ改組を行い、平成9年に研究科の改組、博士課程を設置するなど、当時改革期にあった。A学科では、さらなる変革・発展をめざして、入学後のカリキュラムや入試方法の改革をすすめていった。入学後のカリキュラム改革については、2・3年生にも少人数教育・セミナーを平成12年から行うこととした。入試方法の改革については、平成12年から「配点の自己申告制」を導入した。

「配点の自己申告制」の導入は、少子化に伴う志願者の減少を見据えた上で、A学科の存続をかけて志願者確保および、多様な入学者の確保のために行った。「配点の自己申告制」の仕組みは、前期日程の個別学力試験終了後に5つの配点パターンの中から本人が有利と思う配点パターンを選択し、申告するというものである。配点パターンは5つあり、センター試験（以下センター）＋個別学力試験（以下個別）はいずれも合計1300点満点である。パターン1はセンター重視、パターン2～5は個別重視で、得意科目が有利にはたらくパ

ターンを選択することが可能である。

R学部は、さらに平成18年に4学科へ改組を行った。A学科はこの改組において変更はなかった。山口大学では近年志願倍率が2倍を割る学科も現れる中で、A学科は「配点の自己申告制」が功を奏してか、前期日程で4倍程度の志願倍率を維持し安定している。このA学科の状況を受け、B学科も「配点の自己申告制」を平成24年から導入した。結果、B学科においても志願者確保がもたらされている。

しかし、平成32年度から導入が予定されている大学入学希望者学力評価テストによって、「配点の自己申告制」を単純に継続していくことは難しいであろう。平成32年以降、大学入学希望者学力テストが段階評価の場合は、新たな制度設計が求められる。大学入学希望者学力テストがこれまでのセンター試験同様、得点を利用することが可能であれば継続可能だが、大学はアラカルト入試で入学者に何を求めるのか明確な説明を求められる。いずれにしても、平成32年の入試変更に合わせて、入試方法の見直しが重要になっている。

本稿は15年の実績の上に成り立つ個性的な入試方法の開発に資することを目的として、特にA学科に焦点を当て、「配点の自己申告制」の志願者確保および、多様な入学者の確

保についての効果と問題点を明らかにする。

2 志願者確保と多様な入学者の確保

2.1 志願者確保への効果

A 学科の 5 つの配点パターンの詳細は次のとおりで、いずれも合計 1300 点満点である。

< A 学科配点パターン >

- パターン 1: センター 900 (国 200, 地歴・公民 100, 数 200, 理 200, 外 200) + 個別 400 (数 400)
- パターン 2: センター 450 (国 100, 地歴・公民 50, 数 100, 理 100, 外 100) + 個別 850 (数 850)
- パターン 3: センター 630 (国 140, 地歴・公民 70, 数 140, 理 140, 外 140) + 個別 670 (数 335・理 335)
- パターン 4: センター 630 (国 140, 地歴・公民 70, 数 140, 理 140, 外 140) + 個別 670 (数 335・外 335)
- パターン 5: センター 315 (国 70, 地歴・公民 35, 数 70, 理 70, 外 70) + 個別 985 (数 335・理 325・外 325)

私立大学では得意とする科目の配点を高くするよう出願時に配点パターンを選択可能な大学が見られる。A 学科の仕組みは個別試験終了後にセンターと個別の出来具合を判断し、本人が有利になる配点パターンを選ぶことができる。この入試方法の志願者のメリットは、センターにおいて失敗をしても個別で挽回することが可能と思われることであろう。出願時に配点パターンを選択する入試方法では、自分の得意科目に配点を厚くすることはできるが、得意科目だからといって常に実力が発揮でき高得点が取れるという保証はない。多くの入試で行われている固定された配点は、受験者を同じ条件で公平に順位付けるという点で明確さはあるが、運による部分があることは排除できない。「配点の自己申告制」は、受験後、自分の入試成績を相対的に推察して判断し、決定する力を合否に影響を及ぼす一つの要因として作り出したと考える。

A 学科がこの入試方法の導入を発表したのは平成 10 年である。この年、国立大学協会は『大学入学者選抜の改善に向けて』の中で、「各大学が特色ある大学の創造、それに伴う

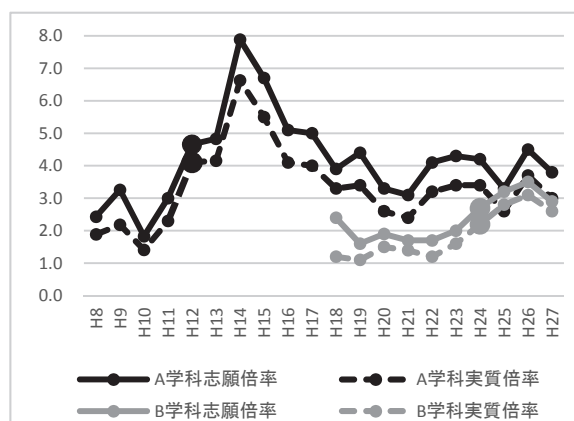


図 1 志願倍率・実質倍率の推移

個性的な入試の在り方や実施等の改善の方策を検討していくこと、センター試験そのものの利活用を含めて、各大学・学部・学科が、それぞれの特色を生かした個性的な運用の仕方を自己責任の下で確立していくことこそ大切であると考えられる。」(国立大学協会, 1998: 39) と述べている。A 学科はまさに個性的な運用の仕方を自己責任の下で確立した一例と言えるだろう。

では、実際に目的どおりに志願者確保がもたらされたのか確認する。志願倍率(志願者数/募集人員)・実質倍率(受験者数/当初合格者数)の推移(図 1)を見ると、A 学科は「配点の自己申告制」を導入した平成 12 年にそれまでは 3 倍を超えるかどうかだった志願倍率が 4.7 倍まで上昇し、平成 14 年は 7.9 倍になる。平成 16 年以降志願倍率は落ち着き 4 倍前後を推移している。ちなみに平成 24 年から導入した B 学科もそれまで 2 倍を維持できなかった志願倍率が導入年に 2.7 倍に上昇し、以降 3 倍程度で維持されている。なお、図は省略するが、「配点の自己申告制」を導入していない 2 学科は、志願倍率は 2 倍前後を推移しており、実質倍率は 2 倍を下回る年が多い状況にある。志願者の確保という意味においては、「配点の自己申告制」は効果があったと言えるであろう。

2.2 多様な入学者確保への効果

「配点の自己申告制」の入試方法において、合否へ影響を及ぼすと思われる受験後の自己申告は、実際にどのように機能しているのだろうか。山口大学の入学者追跡調査のデータ（入試から入学後の学業成績、学籍状況、入学時の意識、卒業時の意識、卒業後の状況等の個人データが学籍番号で連結されている）がそろそろ平成 21 年入学者以降のデータを用いて分析を試みる。

配点パターン別の自己申告状況（表 1）を見ると、A 学科の志願者はセンター重視のパターン 1、個別の数学重視のパターン 2 が多い。パターン 1、パターン 2 はいずれも数学の配点ウェイトが高く、数学の得点が高い志願者を確保していると言える。合格者はパターン 1 が大部分を占める。パターン 2～5 による合格者は例年 2 割程度しかない。自己申告という合否を分ける要因が新たに入っても、合否に大きく寄与するところはセンターであることは否めない。また、パターンの選択から、数学ではなく理科科目の得点が高い合格者も少数であるがみられる。

なお、数学のセンター試験利用科目について全国の科目別平均点（図 2）をみると、数学 I・数学 A の平均点が平成 22 年、平成 25 年に低い。この 2 つの年は、志願倍率、受験者の自己申告パターンに同様の傾向が見られないことから、出願の動向はセンター試験の結果以外にも要因があることが考えられる。

合格者の個別試験による合否入れ替わり率（二次入れ替わり率）（垂水・山本，1999：64）（表 2）を見ると、A 学科は年度の差はあるが 2 割から 4 割である。ちなみに、B 学科は配点の自己申告制を導入後、合否入れ替わり率が高くなっている。A 学科では 2～4 割程度が個別において挽回した入学者といえる。

表 1 配点パターン別の自己申告状況

		平成 21	平成 22	平成 23	平成 24	平成 25	平成 26	
A 学科	志願者	パターン 1	54	95	57	62	39	79
		パターン 2	41	98	74	66	60	63
		パターン 3	10	8	11	13	7	7
		パターン 4	2	11	2	2	3	5
		パターン 5	2	6	2	3	4	3
	合格者	パターン 1	33	31	34	36	34	32
		パターン 2	4	13	3	4	3	7
		パターン 3	5	0	5	2	5	0
		パターン 4	1	2	0	0	1	2
		パターン 5	0	0	0	1	0	0
B 学科	志願者	パターン 1	—	—	—	47	10	19
		パターン 2	—	—	—	31	21	31
		パターン 3	—	—	—	53	21	16
		パターン 4	—	—	—	29	54	49
	合格者	パターン 1	—	—	—	10	7	6
		パターン 2	—	—	—	25	14	18
		パターン 3	—	—	—	1	4	2
		パターン 4	—	—	—	4	12	10

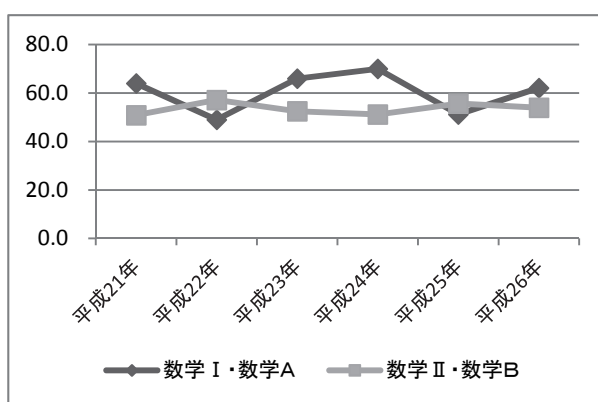


図 2 センター試験数学科目別平均点 (全国)

出所) 大学入試センターホームページ「過去の試験情報」より筆者作成

表 2 合否入れ替わり率の状況

	21 年	22 年	23 年	24 年	25 年	26 年
A 学科	23.3	39.5	23.8	23.3	9.3	39.0
B 学科	14.3	10.5	24.3	27.5	43.2	21.6
導入していない学科 1	7.7	11.5	9.6	10.0	19.6	13.5
導入していない学科 2	15.0	15.0	30.0	25.0	9.5	23.8

表 3 配点パターン別卒業率

	平成 21 年入学者	平成 22 年入学者
センター重視	77.4%	86.2%
個別重視	88.9%	72.7%
全体	80.0%	82.5%

この意味で少数ではあるが、多様な入学者が獲得されたと見ることができよう。

3 配点パターンがもたらす入学者の特性

3.1 分析対象者

では、「配点の自己申告制」による配点パターンの自己選択の違いが入学後の特性として表れるのか分析を試みる。分析対象者は、A 学科に前期日程で入学した平成 21 年 40 人、平成 22 年 40 人である。平成 27 年 3 月現在、入学から卒業までの連結データが分析可能な

表 4 配点パターン別 GPA

		平成 21 年入学者				平成 22 年入学者			
		度数	平均	F	有意確率	度数	平均	F	有意確率
全教科	センター重視	31	1.92	0.32	0.575	29	2.17	0.045	0.833
	個別重視	9	2.06			11	2.22		
	合計	40	1.95			40	2.18		
専門教科	センター重視	31	1.92	0.32	0.575	29	2.04	0.193	0.663
	個別重視	9	2.06			11	2.16		
	合計	40	1.95			40	2.07		

表 5 配点パターン別卒業後の進路

		平成 21 年入学者				平成 22 年入学者			
		大学院進学	就職	その他	合計	大学院進学	就職	その他	合計
センター重視	度数	3	6	8	17	9	6	3	18
	%	17.6%	35.3%	47.1%	100.0%	50.0%	33.3%	16.7%	100.0%
個別重視	度数	3	4	0	7	3	2	2	7
	%	42.9%	57.1%	0.0%	100.0%	42.9%	28.6%	28.6%	100.0%
合計	度数	6	10	8	24	12	8	5	25
	%	25.0%	41.7%	33.3%	100.0%	48.0%	32.0%	20.0%	100.0%

形で揃っているのはこの 2 年分である。配点パターンについては、パターン 1 をセンター重視とし、パターン 2~5 をまとめて個別重視と分類し分析に用いる。

平成 21 年および平成 22 年入学者の配点パターン別卒業率（表 3）を示しておく。卒業率は年によって状況が異なっている。

3.2 入学後の学業成績および進路

配点パターンによって入学後の学業成績にどのような違いが生じているのか、4 年間の GPA 及び 1 年時の GPA を全教科と専門教科ごとに平均値を比較してみる。

配点パターン別 GPA（表 4）を見ると、サンプルサイズが小さいため検定は有意になりにくく検定結果は有意ではないが、個別重視の GPA がセンター重視よりも GPA は高い傾向にある。

続いて、配点パターン別の卒業後の進路（表 5）について見る。配点パターン別卒業後の進路についても卒業率と同様に年によって状況が異なっている。

3.3 資質・能力自己評価にみる特性

では、「配点の自己申告制」は入試において何をもたらしているのだろうか。限られた時間の中で、自分の入試結果の相対的な位置を推測し、判断し、決断しなければならないことを考えると、GPA では測れない資質・能力が差異として生じているのではないかと考える。そこで、入学時と卒業時に実施している資質・能力の自己評価を用い、配点パターン

別の入学時と卒業時に保有する資質・能力の特性を分析する。

資質・能力の自己評価項目については、大学の人材育成の視点からアンケート調査を実施している入学時調査と卒業時調査の資質・能力自己評価 24 項目（林・富永，2009：176-177）を用いる。資質・能力自己評価項目 24 項目（表 6）は、4「当てはまる」、3「ある程度当てはまる」、2「あまり当てはまらない」、1「あてはまらない」と得点化し、入学区分別に一元配置分散分析を行い、平均値の比較を行った。

平成 21 年入学者の分析の結果（表 6）、個別重視のパターンを選択した者は、入学時に「物事を筋道立てて論理的に考察することができる」（論理的思考力）、「既存の概念にとらわれず、新しいものを生み出そうとする意識が高い」（企画力）を自己評価する傾向にあり、センター重視のパターンを選択した者は「指示されなくても、自分で判断して行動ができる」（自主性）を自己評価する傾向にあった。

卒業時には、センター重視の配点パターンを選択した者が「他人と協力しながら研究や作業を進めることができる」（協調性）、「交友関係が豊かである」（人脈）を自己評価する傾向にあり、個別重視の配点パターンを選択した者は、「与えられた前提、条件から結論を推論することができる」（推察力）を自己評価する傾向にあった。

平成 22 年入学者の分析結果は紙面の都合

前期日程の受験者による「配点の自己申告制」の効果と問題点

表 6 平成 21 年入学者の入学時と卒業時に保有する資質・能力

		入学時				卒業時			
		度数	平均	F	有意確率	度数	平均	F	有意確率
社会生活を営む上で求められるマナーが身につけている	センター重視	31	2.90	.658	.422	17	2.88	.007	.936
	個別重視	8	3.13			7	2.86		
	合計	39	2.95			24	2.88		
社会問題への関心が高く、幅広い知識・教養を身につけている	センター重視	31	2.61	.887	.353	17	2.47	.093	.763
	個別重視	8	2.88			7	2.57		
	合計	39	2.67			24	2.50		
自分の考えを他人にわかりやすく話すことができる	センター重視	31	2.29	.276	.602	17	2.76	.319	.578
	個別重視	8	2.13			7	2.57		
	合計	39	2.26			24	2.71		
自分の考えを文章を用いて的確に表現することができる	センター重視	31	1.94	.049	.826	17	2.53	.320	.578
	個別重視	8	2.00			7	2.71		
	合計	39	1.95			24	2.58		
自分の考えや論理を他人にわかりやすくプレゼンテーションすることができる	センター重視	31	2.00	0.000	1.000	17	2.53	.320	.578
	個別重視	8	2.00			7	2.71		
	合計	39	2.00			24	2.58		
他人の発言や発表内容を素早く的確に理解することができる	センター重視	31	2.55	.079	.781	17	2.88	.234	.634
	個別重視	8	2.63			7	2.71		
	合計	39	2.56			24	2.83		
物事を筋道立てて論理的に考察することができる	センター重視	31	2.77	4.878	.033	17	3.24	.094	.762
	個別重視	8	3.25			7	3.14		
	合計	39	2.87			24	3.21		
細かいことにとらわれず、的確に全体的な判断を下すことができる	センター重視	31	2.77	.008	.929	17	2.88	.919	.348
	個別重視	8	2.75			7	2.57		
	合計	39	2.77			24	2.79		
成果をあせらずに、地道な努力を積み重ねることができる	センター重視	31	2.58	.018	.893	17	2.65	.257	.617
	個別重視	8	2.63			7	2.86		
	合計	39	2.59			24	2.71		
周囲の雑音を気にせず、研究や仕事に長時間取り組むことができる	センター重視	31	2.45	.904	.348	17	2.65	.232	.635
	個別重視	8	2.75			7	2.86		
	合計	39	2.51			24	2.71		
困難に直面したとき、冷静に打開策を見出すことができる	センター重視	31	2.58	.571	.455	17	2.76	.026	.872
	個別重視	8	2.38			7	2.71		
	合計	39	2.54			24	2.75		
不明なこと、理解できないことは納得できるまで追求する	センター重視	31	3.19	1.211	.278	17	3.06	.322	.576
	個別重視	8	2.88			7	2.86		
	合計	39	3.13			24	3.00		
既存の概念にとらわれず、新しいものを生み出そうとする意識が高い	センター重視	31	2.58	7.005	.012	17	2.53	.320	.578
	個別重視	8	3.25			7	2.71		
	合計	39	2.72			24	2.58		
何事にもチャレンジ精神が旺盛である	センター重視	31	2.87	.000	.988	17	2.65	.378	.545
	個別重視	8	2.88			7	2.86		
	合計	39	2.87			24	2.71		
自分の欠点を自覚し、常に改善の努力を続けている	センター重視	31	3.00	.338	.564	17	2.53	.238	.630
	個別重視	8	2.88			7	2.71		
	合計	39	2.97			24	2.58		
他人と協力しながら研究や作業を進めることができる	センター重視	31	3.00	3.676	.063	17	2.88	6.170	.021
	個別重視	8	2.50			7	2.00		
	合計	39	2.90			24	2.63		
周囲の意見や風評に流されることなく、善悪の判断ができる	センター重視	31	2.84	.021	.887	17	2.88	.859	.364
	個別重視	8	2.88			7	3.14		
	合計	39	2.85			24	2.96		
交友関係が豊かである	センター重視	31	2.61	1.984	.167	17	2.82	8.993	.007
	個別重視	8	2.13			7	1.86		
	合計	39	2.51			24	2.54		
指示されなくても、自分で判断して行動ができる	センター重視	31	2.71	6.065	.019	17	2.88	.128	.724
	個別重視	8	2.13			7	3.00		
	合計	39	2.59			24	2.92		
新しい機器類の操作を学んだり、率先して新しい技術を覚え、必要に応じた活用が十分できる	センター重視	31	2.58	.835	.367	17	2.47	.367	.551
	個別重視	8	2.88			7	2.71		
	合計	39	2.64			24	2.54		
必要とする情報や未知の知識を得るための手段や方法をよく知っている	センター重視	31	2.32	.357	.554	17	2.53	1.289	.269
	個別重視	8	2.50			7	2.86		
	合計	39	2.36			24	2.63		
他人の意見・行動に根拠ある批判ができる	センター重視	31	2.68	.587	.448	17	2.47	3.766	.065
	個別重視	8	2.88			7	3.14		
	合計	39	2.72			24	2.67		
与えられた前提、条件から結論を推論することができる	センター重視	31	2.65	1.962	.170	17	2.59	9.835	.005
	個別重視	8	3.00			7	3.43		
	合計	39	2.72			24	2.83		
リーダーになって集団をまとめることができる	センター重視	31	2.23	.118	.733	17	2.47	.190	.667
	個別重視	8	2.13			7	2.29		
	合計	39	2.21			24	2.42		

で省略をするが、平成 22 年入学者も平成 21 年入学者と同様に個別重視のパターンを選択した者は入学時に論理的思考力を自己評

価する傾向にあった。

「配点の自己申告制」は、少数ではあるが、論理的思考力が高いと自己評価する者を獲

得し、推察力が高いと自己評価する者を大学教育において育てているとみなすことができるであろう。

以上の結果から、「配点の自己申告制」により、前期日程においても、資質・能力の異なる志願者を獲得していると言える。

3.4 「配点の自己申告制」の問題点

A 学科において開発された配点の自己申告制は、志願者確保という最も重要な課題を改善したこと、前期日程において多様な資質・能力を保有する入学者を確保したことは評価できるだろう。しかし、実施上においては、非常に煩雑な処理を要している。電算システムが A 学科は他の募集単位と一様でないことだけでなく、個別試験当日に受験者に申告させることにより、急を要すチェック項目が増えることになる。入試に携わるスタッフの努力によって成り立っている。

山口大学では、山口大学の入試がわかりやすいように、また他学部と比較検討しやすいように、できるだけ入試をシンプルに、学部単位で入試を統一にするという方針がある。その意味からは、A 学科の R 学部は大学方針に従わず独自路線を進んでおり、大学発行の広報物、受験産業が発表する広報物の表記は複雑になっている。

さらに、入試実施状況の公表資料においても、センター試験や個別学力試験について、一般的に求められる情報を一般的なかたちで整理できないため公表資料が少ない。志願者にとっては過去の入試状況がわかりにくく、学内においては入試評価を志願者の増減でしか判断できない入試になっている。

志願者は満足のいく実施状況等の公表資料が入手できなくとも、センター試験に失敗しても挽回可能性が高いというメリットが恐らく上回っているであろう。

4 まとめ

A 学科が導入した「配点の自己申告制」は、

当初の目的どおり、志願者確保につながった。センター重視のパターンで入学した学生と個別重視のパターンで入学した学生では、入学後の GPA や入学時、卒業時の資質・能力評価に異なる傾向が見られ、多様な入学者の確保がもたらしていることが分析結果から明らかになった。

「配点の自己申告制」は 1 点刻みの選抜ではあるが、決して画一化された条件ではなく、従来の公平性からは逸脱した入試方法だったと言えるだろう。公平から公正な大学入試への転換が求められている今、A 学科が 15 年維持してきた「配点の自己申告制」という独自の入試方法は志願者確保、多様な入学者の確保という点で十分機能を果たしていたと評価しておきたい。

参考文献

- 国立大学協会第2常置委員会入試将来ビジョン検討小委員会(1998).『大学入学者選抜の改善に向けて』1998年3月20日
<<http://www.janu.jp/pdf/kankou/h100320.pdf>> (2015年3月11日取得)
- 垂水共之・山本義郎(1999).「合否入替わり率」柳井晴夫・前川眞一編『大学入試データの解析』現代数学社
- 大学入試センターホームページ
過去の試験情報<http://www.dnc.ac.jp/data/shiken_jouhou/index.html> (2015年12月24日取得)
- 中央教育審議会(2014).答申『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』2014年12月26日
- 林寛子・富永倫彦(2009).「入学者追跡調査の新たな試み」『大学入試研究ジャーナル』No.19
- 山口大学鴻理会(1999).「会報 第6号」1999年2月<<http://www.geocities.jp/koridoso/kaihou/kaihou06.pdf>> (2015年3月11日取得)
- 山口大学鴻理会(2005).「会報 第8号」2005年2月<<http://www.geocities.jp/koridoso/kaihou/kaihou08.pdf>> (2015年3月11日取得)